

題名：「旅人の葬式」

名前：Parade556

○ あらすじ（2000字）

環と通子は、高校の同級生・三千春の葬式が終わり、バス停で帰りのバスを待っている  
と、米野香里が現れる。

環も通子も香里のことを憶えていないが、  
香里は元同級生で、三千春に虐められてすぐ  
転校した子だった。三千春の死体に包丁を突  
き刺そうとして失敗した香里は、包丁を取り  
出し、二人に襲い掛かろうとする。

環は何とか香里のことをなだめるも手を負  
傷。香里を許し、一人先にバスへ乗せると、  
環と通子は霊園に戻っていく。

登場人物表

大妻環(38)

専業主婦(自衛官の妻)

大場通子(38)

環の高校時代(サラリ

ーマンの妻)

米野香里(37)

環と通子の同級生(無

職)

保育士(若い女性)

園児たち

大黒啓太郎(69)

バスのドライバー

リントロー(38)

環と通子の同級生

〈舞台〉

田舎町の寂れたバス停。

時刻表の立て看板は、風雨でさび付き、ポロポロの待合室がある。待合室の端には、スタンド式の灰皿。

〈周辺の景観〉

山の麓に1車線の国道。

車道、車の通りはほとんどない。

山と車道を挟んで、田んぼが広がっており、遠くの方に民家が、ぽつんとある。

山上につづく一本道の手前には、立看

板【八乙女霊園へはこちら】。

バス停は、田んぼの前にある。

大妻環（38）、霊園のある山道から喪服姿で下りてくる。

環、バス停までたどり着くと、時刻表を見て、自分のスマホを見る。

環「うげっ、最悪。あと1時間もあんじゃない」

環、ハンドバックから煙草を取り出し、ライターで火をつけようとして空を見上げる。

トンビが上空で鳴く。

環、空を旋回しているトンビを見て、

環「鳥になりたい」

大場通子（88）、バス停の裏から現れる。同じく喪服姿。

通子「何言ってるの。アンタ」

環「うわっ。どこから湧いてきたのよ」

通子「裏」

環「驚かすなよ」

環、吸おうとした煙草をハンドバッグに仕舞う。

通子「驚かしてねーし」

環「アンタ、ほんと足音ないよね」

通子「歩き方がいいのよ。アンタみたいにこすって歩かないから。こーやって」

道子、環の歩き方を真似する。

環「遺伝だし」

通子「矯正できるから」

環「行ったから整体。でも無理だった」

通子「ちゃんとしたトコ行きな。ウチの店、

来い」

環「遠い」

通子「そりゃ、そっちの都合でしょ。ザ・転勤族めが」

環「こんな、あっちこっち行くと思わないじやん」

通子「何事も下調べ」

環「まずは愛でしょ。愛」

通子「愛とはなんぞや？」

環「辞書で調べる」

通子、スマホを見る。

通子「うわ。電波よわ」

環「なんで、こんなところで葬式するかね」

通子「でもさ、意外にすごいと思わない？」

環「何が」

通子「だって、高校出て20年で初よ。初の

死人」

環「「めでたい」的な言い方すんな」

通子「ウチの姉の同級生なんか、大学1年で死んでるし。弟なんか、中学の時に事故で

さ…」

環「(遮って)いいから。そういうの」

通子「だから、意外にレアなんじゃないって

こと。20年目にして初の死人って」

環「よしなさいよ」

通子「そんな言い方、どこで覚えた？」

環「アンタと会ってなかったこの20年のど

こかで」

通子「官舎だ」

環「思い出させるなよ」

通子「自衛隊は、お国を守ります」

通子、敬礼してみせる。

環「だからあ」

通子「このバスの行き先はそこっしょ？」

通子、バスの進行方向を指さす。

環「ダイレクトには着かない」

通子「乗り継いで」

環「乗り継ぎやね」

通子「着くんだ」

環「着くでしょ。そりゃ」

通子「着くよね」

環、盛大に溜息をつく。

通子「とりあえず座ろうよ」

環「賛成」

環と通子、ベンチに座る。

環「うわ。隙間に煙草の吸殻ある」

通子「アンタも煙草吸うじゃん」

環「いや、自分のと他人のは違うでしょ」

通子「なんかさあ……」

環「アンタさ、ほんと変わらないよね」

通子「何が」

環「20年前と、テンポ。会話。大体、人が

喋ってる途中で別のこと話し出す」

通子「え？そう」

環「そう。嫌いだったわ、そういうところ」

通子「20年越しの告白かよ」

環「あの頃から言ってた」

通子「昔から、ほんと話かみ合わないなウチ  
ら」

環「でもなんか一緒にいた」



通子「それが今や、一等陸佐殿の奥方とはね」

環「マジでやめて。ほんと」

通子「そうそう。その感じ。ヤなこと言われ

た時のリアクションは一緒。20年前と」

環「うるさいな」

通子「やっぱり嬉しいね。久々にみんなと会えて」

環「言葉のチョイスがいちいち違うんだよな」

通子「それは20年前も言われてたかも。特

にアンタから」

環「そうだったけ？」

通子「うわ。言った方は覚えてないんだ」

通子、環に顔を近づける。

環「近寄るなオバサン」

通子「あんたも十分、ババアだから」

通子、元に戻る。

環「自覚あるわ」

通子「ちよっとお、せつかくだから今日は現実、忘れようよ」

環「どの口が言う」

通子「正直言う。今日は、ピクニック気分であつた」

環「どれだけ不謹慎なんだアンタは」

通子「会いたくなかった？みんなに」

環「どちらかという逃げたかつた方かな。

日常から」

通子「アタシはどっちも」

環「あと1時間かあ」

通子「もう56分でしょ」

環「バス、時間通りくるかね」

通子「来てほしくない感じだ」

環「来てほしくない」

通子「あ、あと55分」

環「あと1時間」

通子「55分、54秒。3、2、1…」

環「やめろ」

通子「戻ればいいじゃん。送迎バスあったよね」

環「なんか、ヤだったのよ。行きとか地獄だった。なんか20年振りなのに、昔の感じをみんなが取り戻そうとしてて。でもさ、見た目はもうおじさんとおばさんじゃん。

帰りもアレはキツイ。しかも酔ってるし」

通子「これからアンタと1時間もキツイけどねえ」

環「55分だろ」

通子「我慢しな。こつちも我慢するから」

環「もう、話すことないんだけど」

通子「なんか、20年前もそんなこと言っ  
てなかった？ファミレスで」

環「フェアリーズ聖蹟桜ヶ丘店だ」

通子「フェアリーズ、潰れたねえ。アレ、何年前？」

環「うちらが大学出て就職した頃じゃない？」

通子「え？もっと後でしょ。調べよ、って無理なんだ電波」

環「ドリンクバーしか頼まないで、店の人に  
チヨ―嫌われてた」

通子「なんか、意地になって行ってたよね」

環「アレなんでかな？」

通子「若さ？」

環「若さか…」

通子「今も若いじゃん」

環「ほんとか？」

通子「ババアではない」

環「正直、中途半端なのよ。何もかも」

通子「確かに。いつそ行き切った方がいいね」

環「70くらい？」

通子「それは行きすぎ」

環「じゃあ50」

通子「50か。なんか、今と感覚変わらない

気がする」

環「10年後」

通子「12年後」

環「細かいなあ」

通子「2年はでかいでしょ」

環「きつとあつという間よ。なんか、そんな  
感覚のまま、死ぬんじゃない？ぴえん」

トンビが上空で鳴く。

環「なんか言いなよ」

通子「何に対して？」

環「ぴえん」

通子「ぴえん、て何？」

環「え？知らないの。うちの娘、チヨー言  
ってるよ」

通子「うち、息子」

環「男子も言ってるって」

通子「聞いたことないなあ。一等陸佐殿のご  
家庭とは」

環「わかったわかった。もう降参。今はやめ  
よ。それ」

道子、スマホを見る。

通子「あと53分は」

環「いや、バス乗ったら終わりじゃないから」

通子「でも連行されるわけで」

環「連行」

通子「他の表現あれば、どうぞ」

環「それに近い」

通子「良い人生じゃん」

環「進むことも、戻ることも地獄よ」

通子「：そういうええさ、なんでこんな田舎ま

で来たんだっけ」

環「忘れてやるなよ」

通子「ああ。死んだんだ。同級生」

環「そ」

通子「ウチらの代、初の死人」

環「言い方」

通子「ウチらもいつか死ぬんだよ」

環「そりゃそうでしょ」

通子「国葬？」

環「何の話？」

通子「一等陸佐殿の場合」

環「そんなわけあるかッ」

通子「幕僚長とかなるかもじゃん」

環「うーん。そこまでは無理かな」

通子「アンタ、結婚式でもその言い方してた」

環「そうだったけ？」

通子「そう。でも出世した」

環「あっ、そう。そう言えばさ、あの頃の会

話、憶えてる？」

通子「なんか、無理矢理話変えたね」

環「変えさせてよお」

通子「しょーがない。乗ってやるか」

環「ありがてえ」

通子「アンタは？」

環「思い出すのは、フェアリーズのムカつく

店長の顔だけ」

通子「でもさ、エロい目で見てたよね。絶対」

環「アンタをね」

通子「アンタもだよ」

環「女子高生なら、何でもよかったんじゃないな

い?。」

通子「アイツ、今、何してんのかね」

環「今はいいでしょ。ソレ」

通子「そつちが出したんじゃん」

環「アイツの話、しようよ。今日くらい」

通子「アイツって？」

環「アイツだよ。ウチらの同級生・三千春くん」

通子「ああ。職業・旅人」

環「旅人って」

通子「40前に死んで良かったんじゃない」

環「…」

通子「だって、そう思わない？ 要はプータロ―じゃん。今更、就職できないっしょ」

環「別に、良いじゃん。三千春の人生なんだから」

通子「…」

環「黙るなよ」

通子「無責任だよ」

環「何故、責める？」

通子「なんか、アンタと話していると息が詰ま



る」

環 「20年越しの本音かよ」

道子 「あの頃も言ってた」

環 「言ってるない」

通子 「言ってた。アンタが憶えてないだけ」

環 「お互い様だろ」

通子 「なんかムカつく」

環 「こっちだって。なんかよくわかんない角

度から責められて、しかもアルコールも入

ってるんでさらにムカついたけど、あと5

0分は一緒にいないといけないから、我慢

する」

通子 「バスの中はどうする？」

環 「離れて座ろ」

通子 「そうだね」

環と通子、そっぽを向く。

通子 「てか、旅人ってなんだよ」

環と通子、顔を見合わせて吹き出す。

環「一応、旅人の定義、調べるわ」

環、スマホをとる。

環「あ、電波無理だった」

通子「え？普通のならいけるでしょ？」

環「うちも格安スマホなんで」

通子「え？マジで？」

環「そうだよ。文句ある。あ、言うなよ。あのワード」

環、バスの進行方向を指さし、

環「もう、あっちの話はするな」

通子「わかりやした」

環「お互い、節約してんだね」

通子「主婦なもんで」

環「お互い、こんな未来になるなんてね」

通子「ファミレス時代に戻りたい」

環「えー。それはいいや」

通子「なんでよ。1日くらいなら」

環「1日ならいいけど」

通子「またエロい目で見られたい」

環「今も見られるでしょ？十分」

通子「ないない。普通のおばさん」

環「バイト先にさ、若い子いないの？」

通子「ああ。大学生とかならいるけど」

環「え？それは裏山」

通子「ウラヤマ？」

環「知らないの？羨ましいの略よ」

通子「娘が言う？」

環「そう」

通子「なんかイメージつかない」

環「なんかあると、いちいちアッチ（バスの

進行方向を指さし）の方に行きそうになる

ねアンタ」

通子「20年前の言葉で喋れ」

環「そんなもん忘れた」

通子「なんか、チャンポンになってんじゃん」

環「ソレ、あの頃は言っていなかった。絶対」

通子「言ってた」

環「言わないでしょ。JKが、チャンポン」

通子「JKも言っていなかったろ」

環「JK」

通子「JK。あの頃、なんて言っていた？」

環「うーん。思い出せない。で？」

通子「で？」

環「続き。早く」

通子「続きとは？」

環「だから、バイト先の大学生」

通子「え？そんな話してたっけ？」

環「だから、バイト先に大学生いるんですよ」

通子「ああ。片倉くん」

環「名前までは言っていない」

通子「体育大の子」

環「さらにエロさが増す」

通子「ただの筋肉バカだよ」

環「で？」

通子「で？」

環「いいから。話せよ。ソイツとのこと」

通子「別に、何もない」

環「いや、あのね、電波も通じない。アルコ

ールが若干抜けてきて、段々肌寒くなって

きたこんな辺鄙なバス停だよ。心と体が熱

くなるネタもってんじゃない。そっちは。こ

っちは官舎生活で枯れ果てちまったっての

に」

通子「一気に喋るなオバサン」

環「もったいぶるなよオバサン」

通子「ほんとに、何もないから」

環「バイト先に体育大の細マッチョ」

通子「細マッチョじゃないし」

環「じゃあマッチョ？リアルマッチョ？」

通子「とりあえず、別に何もないから」

環「え？どこの所属？」

通子「所属って？」

環「だからはぐらかすなよ。体育大でしょ。

絶対、部活入ってんじゃない」

通子「ラグビー部」

環「ラグビー部」

通子「逆にバカにしてない？我ら一般人を」

環「こちらも一般人。ポジションは？」

通子「それで興奮できる？」

環「できるよ。今なら何でも」

通子「えーと、何だったっけな」

環「ウイング？ウイングなら細マッチョでし

よ」

通子「あ、そうそう。フオワード？フオワー

ドかも」

環「フオワードかあ。デブ？」

通子「デブじゃないけど、デブみたい」

環「∴それはそれでいいじゃん」

通子「どうした？マジで」

環「官舎暮らし」

通子「そこまで言われると監獄しか湧かない。

マジで。あの海の孤島にある。なんだけっ

け。えーと」

環「アルカトラス。まあ、うん。そんな感じ」

通子、急に立ちあがって敬礼をすると、

通子「お国のために、頑張ります」

環「マジでしつこい。座れ」

通子「はい。すいませんしたあ」

通子、座る。

通子「アンタ今、本気でムカついたね」

環「…」

通子「どうも、すいません」

環「お詫びに片倉くんの話つづける」

通子「うーん。ほんとにない」

環「体育大。ラグビー部。ウイングが良かったけどフオワード」

通子「しつこいなあ。思い出したくないのよ。

彼のことは」

環「なんで？強引にされた？」

通子「いや、チョー奥手。あれはきっと童貞」

環「すごい。筆おろしって言うらしいね」

通子「アンタ。普段、家で何やってんの」

環「噂話とネットサーフィン」

通子「国、守れ」

環「それは旦那の仕事」

通子「マジですごいらしいじゃん一等陸佐つて」

環「ただの筋肉バカだったんだけどね」

通子「しかも史上最年少で一等陸佐になったんでしょ？将来の幕僚長候補みたいじゃん」

環「よく憶えたね。さっきの同級生たちの会話で」

通子「だって、アンタの旦那だよ。20年前、ファミレスでうだうだ喋ってただけなのにさ。ダンナ、その過去知ってんの？」

環「あのね」

通子「むしろ、そっちの話してよ」

環「コンセプトとズレる」

通子「何か嫌なトコがあるわけ？モラハラ的な一面ある？」

環「まだ続けますか？」



通子「将来の幕僚長候補殿」

環「いや、普通だよ。ほんとに普通。付き合い

いはじめの頃と変わらない」

通子「ソレ、すごくない？」

環「そう？」

通子「すごいって。全然、出世しなかったと

してもよ、幸せよ」

環「淡泊よ」

通子「なんか見下されてる感じがする」

環「どこに転勤しても、官舎、官舎でさ」

通子「感謝感謝。いいじゃん」

環「つまんない」

通子「アンタが羨ましい」

環「アンタこそ羨ましい」

通子「どこが羨ましいの。こっちは旦那がメ

ーカーの営業で、私は子供の学費のために

接骨院でバイトしてんのよ。優雅なアフタ

ヌーンティーとかないんだからね」

環「それがこの世で一番辛いだよ」

通子「は？なんでよ」

環「慣例で、階級の上の嫁が、官舎の人達を

家に呼ぶわけ。他の奥さん、みんな年上」

通子「すごいじゃん」

環「いやいや、激重でしょ」

通子「優越感じゃん」

環「そういうの、ないなあ」

通子「アンタが選んだ人生でしょ」

環「ソレ、この状況で言う？」

通子「何事も下調べが大事なのよ」

環「じゃあ、不満言うな」

通子「不満？不満は出るでしょ。調べた通り

になんていかんから人生は」

環「それは同意するけど、アレ、なんか論点

ズレてない？」

通子「とにかくエリートよ。アンタは」

環「旦那が偉いだけ」

通子「煙草、吸えば？」

環「何、急に」

通子「官舎戻ったら吸えんでしょ」

環「吸ってる」

通子「どこで」

環「言わない」

通子「言えよ。ネットに書き込んでやるから」

環「最悪」

通子「まあ、いいや。じゃ、近況報告おしま

いね」

環「え？コレ、近況報告だったの？」

通子「いや、そんな感じだったじゃん」

環「まあ、いいけど。ていうか、吸いたいの

?アンタ」

通子「え？いいの？」

環「もらい煙草する？普通」

通子「うわ。聞いたいて。梯子外すの得意だ

ったよね。昔っから」

環「なんだよオマエ」

通子「そうそう。お互いのことオマエって呼

んでた」

環「…」

通子「とりあえず、静かにしよ」

環「はあ？」

通子「なんか、この町を感じたい」

環「村でしょ。ココ」

通子「村なの？」

環「村」

二人、黙って周囲を見回す。

酔っているので動きはスローリー。

通子「ていうかさ、なんでアンタも格安？」

環「は？」

通子「普通に行けるでしょ。普通の」

環「なんでスマホの話になるのよ。だから、

さつきも言ったでしょ。節約」

通子「いらねえよ一等陸佐」

環「なんだと思ってるんだ一等陸佐」

通子「エリート。金持ち」

環「業界じゃエリートかもしれないけど、あ

あ、マジで思い出したくない。マジで辞めて。ていうか金持ちじゃない」

通子「税金」

環「出たキラワード」

通子「え？何よ、そのトラウマ感満載の顔」

環「いや、だから税金で食わせてもらってんだろって」

通子「事実じゃん」

環「事実だよ。事実だけどさ」

通子「いいなあ」

環「良くない。居心地悪い」

通子「ふーん」

環「話題、変えよう。あ、そうだ片岡くんの話」

通子「何で知ってんの？片岡くんのこと」

環「え？アンタ、さっき言ったじゃん。片岡

くん」

通子「それは片倉くん」

環「じゃあ片岡くんとは？」

通子「知らん」

環「え？いや、今、ちょー動揺してたじゃん。

誰？」

通子「え？知らないよ」

環「なんか隠してるな。バイト先？」

通子「いやあ」

環「近所の子だ」

通子「う」

環「うわ、すごい。当たった。マンションの隣の部屋とか。いや違う。下の階の子だ」

通子「なんなんだよオマエ。エスパークか？」

環「暇な時、ネットサーフィンしてるんで。

下の部屋の子。すごい。大学生？片岡くん」

通子「急に饒舌」

環「大学生？」

通子「ミュージシャン」

環「ミュ、ミュージシャンとな」

通子「うぜえ」

環「ちなみに、ちなみになんだけど、食っちゃった？」

通子「言い方」

環「旦那は帰りが遅い。子供も習い事。時間はある」

通子「はあ」

環 「どんな感じなの？」

通子 「…」

環 「話して。話して」

通子 「あのさ」

環 「うん」

通子 「アイツの話、しようよ。今日は」

環 「片岡くん？」

通子 「違うよ。旅人」

環 「旅人はもう死んだ」

通子 「アンタねえ」

環 「片岡くん。下の名前は？」

通子 「…サリー」

環 「え？外人？まさか外人なの？」

通子 「違うから。あだ名」

環 「焦ったあ。先に言ってよお」

通子 「うるさいな。ほんと。騒ぎすぎ」

環 「大丈夫。誰も来ないから」

通子 「人の人生で遊ぶな」

環 「お願い。続きちようだい」

環、通子に顔を近づける。

通子、嫌がる。しかし環は通子から離れようとしなない。

通子「近いよオバサン。近いって」

環「で？」

通子「だから、アイツの話するよ。三千春。

三千春くん。職業・旅人」

環「なんで？生きてる人の話しようよ」

通子「最低だよアンタ」

環「人間は、最低と最低が折り重なってできてるのよ」

通子「なんだ。そりゃ。自衛隊のルールブックにでも書いてあるのか」

環「あるある」

通子「ウソつけ」

環「話してよお」

通子「バスの中で」

環「え？ほんと」

通子「うん。話すから」



環「駅まで30分あるらしいね」

通子「わかったわかった。ほんと近いからオ

バサン」

環「足りないでしょ。それじゃ」

通子「足りるでしょ。十分よ」

環「電車？電車でもOKでしょ？」

通子「電車は無理でしょ。回りに人いるし」

環「サリーならバレないって」

通子「内容の問題」

環「え？そんなにハード？」

通子「ハードって何よ。じゃあ話さない」

環「わかった。じゃあバスね。バスだからね」

通子「近い。近いってオバサン」

環「だからかあ、アンタ、なんかつやつやし

てるもん」

環、道子の頬を触る。

道子、嫌がる。

通子「触んな。ババア」

環「ちよーだい。ほんと、ちよーだい」

通子「はあ」

環、通子から離れる。

環「よし。じゃあ話そう。アイツのこと話そう」

通子「だから、バスの中でしょ」

環「違う違う。職業・旅人」

通子「さつき散々言ってたくせに…なんでそんな気合入るかな」

環「うん。話そう」

通子「いや、そっちからはじめなよ」

環「うん。彼は旅人で」

通子「うん」

環「まあ、プータローだよ。つまりは」

通子「なんか知ってる情報しかないな。で？」

環「旅先で死んだ。事故で」

通子「それも葬式で聞いたな」

環「旅人だから」

通子「ただの旅行だったんじゃないの？」

環「そもそも旅人って何？」

通子「旅をする人」

環「それで」

通子「以上」

環「それ、職業？」

通子「仕事になるならね」

環「亡くなった人、そんな責めなくても」

通子「いや、責めてないし。むしろ、どうで

も良い部類だよね」

環「悲しい。悲しいね。三千春、みちはるう」

通子「今、絶対サリーのこと考えてたよね。

絶対」

環「いやいや」

通子「約束したよね？」

環「したした」

通子「バスの中」

環「え？バスの中でした？」

通子「するかッ」

環「なんか、包括的にエロい」

通子「欲求不満か」

環「抑圧されてんのよ。人生」

通子「選んだのはアンタ」

環「下調べが足らなかつた。反省してる」

通子「それはこっちも一緒」

環「でも、今、いいじゃん。サイコーじゃん」

通子「どこが？」

環「パラダイスじゃん」

通子「泡沫。罪悪感でいっぱいになるし」

環「でも会いたくなるんでしょ？どこで会う

の？どこで？家の中？ベッドとか使ってる？」

通子「一気に来るな。バスの中でしょ」

環「そっちが話したんだけどね」

通子「なんかないの？」

環「ん？」

通子「いや、時間つぶし。もう話すことない」

環「聞きたいことはあるけどね」

通子「事情聴取やめて」

環「自衛隊は事情聴取しない」

通子「アンタは、その妻でしょ」

環「選んだのは自分」

通子「本とか読みなよ」

環「ネット使えないとねえ」

通子「Kindleで読め。ダウンロードしてたら

読めるでしょ」

環「いやいや、今、無性にネットサーフィン  
したい」

通子「暇か」

環「暇よお」

通子「笑うな。エクボがムカつく」

環「ほんとに羨ましい」

通子「だから、笑うんじゃねえ」

斎場のある坂道から下りてきた喪服姿  
の米野香里(37)、バス停に現れる。

環と通子、顔を見合わせ、こそこそと  
喋る。

環「あれ？えーと」

通子「うーんと、同級生だよね。たぶん」

香里、ベンチの反対側に立つと、二人  
に向かって小さく会釈する。その手に  
は年代物のハンドバックをもっている。

環「アンタ、いいなよ」

通子「なんでアタシ」

環「色々とずるいから」

通子「何が」

環「サリ―」

通子「マジで。アンタってヤツは」

環「早く」

通子「（香里に向かって）えーと、同級生だ  
よね？」

環「言い方あるじゃん」

通子「じゃあ、オマエが言えよ」

環「妙齡の女性にオマエ呼ばわり？」

通子「妙齡って、もっと若いから」

香里、うつむいて立っている。

環「あ、ごめんなさい。同級生だね」

通子「それ、さっき言ったから」

香里「…え、ええ」

環「とりあえず、座りなよ。まだバス来るまで時間あるし」

通子「アンタ、ほんとそういうところずるいよね」

環「何がよ」

香里、うつむいて立っている。

環「あ、ごめんなさい。どうぞ、座って」

通子「どうぞどうぞ」

香里「すみません」

香里、ベンチの端にちよこんと座る。

3人、無言。

環と通子、香里との間には微妙な距離。

通子「えーと：ほんとごめん。なんか私も年  
とっちゃって物忘れがひどくて、えーと、

同級生だよね」

環「何回聞いてんのよ」

環と道子、香里を見る。

香里、小さくうなずくと、

香里「はい」

環「ほら。当たり前じゃん」

通子「アンタってヤツは」

環「3年2組だったよね？」

香里「え？あ、はい」

環「ほら」

通子「じゃあ、名前言ってみなよ」

環「え？えーと」

通子「ほら。見栄っ張り」

環「うわ。押すなよオバサン」

通子「えーと、ごめんなさい。お名前って」

香里「米野です。米野香里」



環と通子、顔を見合わせると、うつすらと首をかしげる。

香里は正面を向いたまま、動かない。

香里「ほんの少しだけなんです。すぐ、

転校しちゃったから」

通子「あ、そうか」

環「思い出した？」

通子「（首をかしげる）」

環「アンタねえ」

通子「でもさ、ごめんね。どうしてちょっと

だけいただけなのに、三千春の葬式に来た

の？もしかして、付き合ってた系？」

香里「え？あの」

環・通子「おお」

香里「あの、すいません。付き合ってたわけ

じゃないです」

環「あ、すいません。ほらすぐ早とちりする」

通子「こっただけかよ」

環「でもアレだよ。アイツに、思いがある

から、なんらかの思いがあるから来てくれ

たんだよね？」

通子「来てくれたって、なんかおかしくない？」

環「おかしくないでしょ」

通子「なんか近い感じる」

環「同級生じゃん」

通子「同級生にしても、近いよ。もしかして

昔」

環「今は違うでしょ。ソレ。今はアツチ、ア

ツチ」

環、香里の方を指出す。

あ、となる道子。

環「…」

通子「…」

香里「…」

環「ちよっと」

通子「何よ」

環「頑張れ」

通子「無理っしょ。だって知らないじゃん」

環「憶えてないだけでしょ？」

通子「オマエもだろ」

環「妙齡の…」

通子「だから、使い方間違ってるんだよ」

香里、ハンドバッグから、きらりと光

るものを取り出す。

包丁である。

通子「え？料理人」

環「んなわけあるか」

香里、包丁を見つめている。

環「あの…」

通子「いやいや、ほんとに」

香里「刺してやろうと思って」

環と通子、顔を見合わせる。

通子「えーと、ほんとに同級生だよな？」

香里、うなづく。

環「聞き間違いだよな？刺すって」

香里「あいつ。あいつのせいで、人生めっちゃ

くちやになったから」

通子「え？ごめん。ほんとごめん。主語がな

いから…ごめん」

通子、震えあがっている。

環、通子を支える。

香里、包丁をじっと見つめたまま、

香里「でも、死に顔見たら、なんか失せちゃ

って。だらしない。無様で、情けない顔見

たら」

環「三千春のことだよな。三千春が何か（環  
に向かって）おい。引っ張んなよ服」

通子「お、思い出した」

環「何を？」

通子「あの子」

環「誰？」

通子「すぐ辞めた子」

環「それは知ってる」

通子「3年の春に転校してきて、みんな無

視した子」

環「なんで？」

通子「知らないよ。なんか気づいたらそうな

ってた」

環「ほんとに？」

通子「そう。三千春が、特にイジメてた」

環「嘘」

香里「人間じゃないって。オマエはお化けだ

って」

環「マジか」

環と環にしがみついている通子、香里  
を見る。

香里「やった方は覚えてないんだ」

環「ウチラも？」

通子「当たり前じゃん。アンタ、まだ思い出せないの」

香里、包丁の柄を握る。切っ先が二人の方に向く。

環と通子、抱き合って震えあがる。

香里「刺したら、何か変わるのかな」

環「だ、誰か刺した？」

香里「…」

環「う、上で。同級生、誰か刺した？」

香里「どうだったかな」

通子「やばいよ。やばいって」

香里「何度も殺してるから。全員。何度も、

何度も、何度も」

通子「昔のことじゃん」

環「あ、アンタ。バカ」

香里「昔のこと？私にとっては今なんだよ」

香里「包丁を持って立ち上がる。」

通子「ぎゃあああ」

通子、環にしがみつく。

環「し、しがみつくなつて。おい、おい」

香里、環と通子の方に包丁を向ける。

環「待って。落ち着いて。落ち着いて」

香里「私は落ち着いてる。とても」

環「ウチラが狙い？」

香里「あなた達のこと覚えてる」

環「ウチラも、あなたのことを」

香里「そう。嗤ってた。アイツが私のことを

イジメてるのを見て、嗤ってた」

環「…」

香里「高校を辞めたあとの人生、聞きたい？」

環「…」

香里「あなた達には、どうでもいいよね」

環「いや、いやいや…聞かせて。聞かせてよ。

お願い。お願いします」

香里「ふっ…どうしてあの頃、そう言ってく

れなかつたの」

環「ご、ごめん」

香里「思い出せないの？私のこと」

環「うん。ごめん」

香里「ふふ」

香里、一歩、二人の方に近づいてくる。

包丁の切っ先を向けたまま。

環「聞いて。お願い」

香里「どうぞ」

環「こちらの事情で申し訳ないけど、今は、

死ぬわけにはいかない。私も、この人も」

香里「ふっ」

環「わかるよ。ふざけんなだよね」

香里「私も、普通に生きたかった。あなた達



みたいに」

環「ごめん。それは」

香里「思い出せないくせに、何なんだよ。さつきから」

環「ごめん。今、必死に思い出そうとしてる。

でも、思い出せない。ごめん」

香里「許せない。人の人生をめちやくちやにしておいて」

環「ごめん。ほんとに：アイツ、ほんとにバカでさ。最後の最後までバカでさ」

香里「お前らも同罪だから」

香里、もう一步、二人に近づく。

あと2mで、二人に包丁が届く距離。

環「ちよ、ちよっと待って。待って。三千春、バカだから。最後までバカだったから。だって、旅人だよ」

香里「旅なんか、したことない。外に出るのが怖くて。今日、やっと出れた。アイツを

ちゃんとこの手で殺したくて。それから、他の奴らも全員」

環「米野さん」

香里「結婚してる？」

環「…う、うん」

香里「（包丁の先を、通子の方に向けて）そ  
つちも」

環「え？うん」

香里「私は処女。男の人が怖い。あれから  
ずっと」

環「…」

香里「男の人の声を聴くだけで、震えが止ま  
らなくなる」

環「そんなに」

香里「何が一番許せないと思う？それはね、  
やった方は全然覚えてないこと。それが一  
番許せない」

環「米野さん」

香里「あなたにはある？そういうこと」

環「あるよ。ないわけない」

香里「でも幸せでしょ」

環「幸せじゃない」

香里「でも普通でしょ」

環「普通じゃないよ」

香里「普通よ。あなたに比べたら、私は普通じゃない。全然普通じゃない。そうでしょ」

香里、さらに一歩、二人に近づく。

その距離、1，5mまで近づく。

環「そうね。それはそうかも」

香里「ふふ」

環「何？」

香里「やっとできた」

環「何を？」

香里「やっと、そういう顔させられた」

環「…」

香里「ずっと、そういう顔をさせてやりたかった。アンタもアンタも、上にいる奴らも全員。特にアイツ。あのクソヤロー」

環「…」

香里「やっと…やっと」

香里、おろおろと泣き出す。

環「米野さん」

香里「私の名前を呼ぶな」

環「ごめん」

香里「オマエに呼ばれる覚えはねえんだよ」

環「ごめん」

香里「殺すぞ」

環「待って。待ってってば」

香里「殺してやるぞ。コツチは、失うものな  
んて何もないんだよ」

環「米野さん」

香里「アンタにはいる？悲しむ人、いる？」

環「…ごめん。いる」

香里「なんで謝るの。じゃあ、そっち殺そう  
か」

環「待って。この子にもいるんだ。いるの。」

悲しむ人」

香里「いいね。ほんとに羨ましい。私はね、親から、死んでほしいって言われた。ずっと家にいて、何もできないから。だから、私が人を殺して死刑になったら喜んでくれるんだ。そうに決まってるんだ」

環「そんなことない」

香里「オマエに何がわかんだよ」

環「わかんない。わかんないけど、違うよ」

香里「別に、オマエら殺さなくてもいいよ。

町で、刺せばいいだけだから」

環「それはやめなよ」

香里「止める権利あんのかよ。お前らのせい

だろうがよ」

環「そうだね。そうだ」

香里「思い出せないくせに。ふざけやがって」

環「思い出せないよ。思い出せないけど、ウ

チラのせいなんでしょ？」

香里「そうだよ。他に理由があんのかよ」

通子、環にしがみついたまま叫ぶ。

通子「昔のことじゃん。もう20年も前のことじゃん」

環の表情が固まる。

環、香里の表情を伺う。

香里の顔が紅潮していく。

香里「てめえらあ、ふざけんじゃねえよお」

香里、その場で包丁を振り回す。

まるで見えない敵を振り払うかのよう  
に、包丁を振り回していく。

通子「ぎゃあああ」

環「おちつ、落ち着いて」

香里が振り回していた包丁がバス停の  
ベンチに当たり、ギーンと甲高い音を

発する。

香里「いたっ」

衝撃で、香里の手から包丁が飛んでいく。

香里「いたっ、いたい」

香里、手がしびれて動けなくなる。

環、路肩に落ちた包丁を拾いに行こうとするが、通子が組み付いて動けない。

環「ちよ、アンタ」

香里、這うようにして包丁のところまで行き、包丁を拾い上げる。そして、切っ先を二人に向ける。

香里「殺す。殺してやる。全部お前らのせい

だ。お前らの」

環の視線の先、保育士（若い女性）がカートを押してやってくる。

カートの中には、園児が3人、乗っている。

あ、となる環。

香里が包丁を持っていること、保育士の角度からは見えない。

保育士＆園児「あるー日、森の中、くまさーんに」

園児たち、喪服姿の環たちを見て、

園児A「あ、まっくろくろすけだあ」

園児B「あ、ほんとだあ」

保育士「コラ。ダメでしょ」

環、通子を振り払う。



通子、バス停の座席に身体を打ちつける。

通子「ぎゃっ」

環、香里のところに駆け寄っていく。

そして包丁を手で掴むと、園児たちに見えないようにジャケットの隙間に隠す。

包丁はジャケットを貫通し、切っ先が背中の方に出ている。

園児たちを乗せたカートが真横を通る。

保育士「こんにちはあ」

環「こんにちは」

園児A「何、抱き合ってただよ。きも」

園児B「きもー」

保育士「こら。やめなさい。ほんとにすいません」

環「いえ。全然」

カート、少しずつ遠ざかっていく。

園児たち、振り返ると環と香里に向か  
って、

園児C「バーカ。死ねえ、女あ」

園児A「死ねえバーカ」

保育士「こらあ、悪い言葉使わないよ」

カートが見えなくなると、環、香里か  
ら離れる。包丁をもっていた手から大  
量の出血。

通子「きゃあああ」

香里も動揺している。

香里「な、なんで。なんでだよ」

環「わかんないよ」

香里「子供、刺すわけないだろ。子供、子供、  
好きなんだよ。好きなんだよ」

香里の手から包丁が落ちる。そこには、  
環の血がべっとりついている。

通子、這うようにして環のところへ、

通子「アンタ。血、血でてる」

通子、ハンドバッグからハンカチを出  
すと環の手に巻いてやる。すぐに血で  
赤く染まる。

環「大丈夫。なんか痛くないし」

通子「いや、すごい出てるから。すごい」

環「いや、ほんとに大丈夫」

通子「（香里に向かって）コノヤロー」

環「待って」

通子「環」

環「なんか、久しぶりに名前と呼ばれたかも。

アンタに」

通子「今、そんなこと言ってる場合じゃない  
でしょ」

環「彼女を、米野さんを、犯罪者にしたくない」

香里「…」

通子「もう犯罪者だろ。コイツは」

坂の下から、のろのろと市営バスがやってくる。

ボロボロの小さなマイクロバス。

通子「え？時間。アレ、早くない？」

バスは3人の前で停まる。

包丁は、バスの下。

前方の自動ドアが開く。

運転手・大黒啓太郎(66)が顔を出し、

大黒「ちょっと早くついちゃった。乗って待ってれば？」

環「いえ。空気がいいんでベンチで」

大黒「あ、葬式？」

環「ええ。まあ」

大黒「ああ。しょんべん。ちよつとバス見て  
て」

大黒、バスから降りると、葬儀場のあ  
る坂を上がっていく。

環、香里を起こすと、ベンチへ座らせ  
る。

通子、自分でベンチに座る。

環を真ん中にして、3人が寄り添って  
座る。

香里、おろおろと泣き出す。

香里「私、なんてことを…なんて」

通子「絶対、警察に突き出してやるからな」

香里「許して。許して」

通子「許すかコノヤロー」

環「通子」

通子「うわ。なんだよ」

環「久しぶりに名前で呼んだ」

通子「呼ばれたことないって。ていうか、今、  
それどころじゃない」

通子、立ち上がると香里のハンドバッグを奪い取る。

環「何すんの」

通子「包丁、まだ入ってるかもしれないだろ」

環「入ってるわけないじゃん」

通子、ハンドバックの中をガサゴソと探す。

環「返してやって。返してやりなっ」

環、血のついてない方の手で香里のハンドバッグの紐を掴む。

通子「なんで人殺しの味方すんだよ」

通子が引っ張り返した拍子に、紐がち  
ぎれる。

環・通子「あ」

環と通子、紐の千切れたハンドバック  
を見つめる。

香里も、あつとなる。

環「ごめん。どうしよう」

香里「ソレ、母のなの…怒られちゃう」

通子「関係あるかボケ」

環「ごめん。弁償する」

通子「なんでだよ？殺されかけたんだぞ。ウ

チラ」

環「でも、もう終わりだよ。ね」

環、香里の肩を抱く。

香里、さめざめと泣く。

香里「ごめ…ごめんなさい。ごめ、んなさい。

ほんとにはわかってた。悪いのは自分だって。

全部、あの頃のせいにしてただけだって。

ごめんなさい。ごめんなさい」

通子「警察で言え」

環「もういいから。大丈夫、警察にはいかな  
い」

通子「なんで」

環「もう終わり。ね」

通子「なんでよ。なんで」

環「私はいって」

通子「私は許せない」

環「仲間じゃん」

香里「…」

通子「仲間じゃないだろ。人殺しだよ」

環「そうさしたのは、ウチラだろ」

通子「三千春だろ。悪いのは旅人。何が旅人

だよ」

環「アイツ、無理してたじゃん。人と違う自分  
を演じるのに。ずっと。誰も選ばないよ



うな生き方するんだって」

通子「ただのバカじゃん」

環「そう。ただのバカ。（香里を見て）ね、ただのバカだったよね」

香里「…」

通子「でも、ソイツもバカだろ」

環「ウチラが奪ったんだよ。この子が普通に就職して、結婚して子供を産んで、そういうの全部、奪っちゃったんだよ。ウチラが」

通子「ふ、ふざけんなよ。やだね。納得できない」

通子、興奮して立ちあがる。

環「おいおい」

通子「なんだよ。自衛隊だからかよ旦那が。

考え方まで変わっちゃうのか？」

環「ふふ、でもね、ほんとにそうかもしれない」

通子「何、笑ってんだよ。バカじゃねえの」

環、血がついてない方の手で敬礼する。  
刺された手は、通子から巻いてもらっ  
たハンカチが血で真っ赤。床にもぽた  
ぽたと血が落ちている。

環「お国のために、戦います」

通子「アンタ、マジで手ヤバいって」

環「だから、ほんと痛くない」

通子「救急車」

環「大丈夫。これくらい。お国のために戦い  
ます」

通子「自衛隊、戦わねえし」

環「憲法改正するかもじゃん」

通子「解釈の問題だし。てか、オマエ、それ

どころじゃねえだろ。今」

環「うん。でも、もう終わり。ほんと」

大黒、坂を下りてバス停に戻ってくる。

大黒「どうせ誰も来ないし…もう行くけど乗

「つてく？」

通子「え？まだ時間」

大黒「どうせどこのバス停も客いねえし。い  
いんだわ、適当で」

環「あら」

大黒「3人も客乗るの、久しぶりだなあ」

環、香里を見て、

環「一人で、乗れる？」

香里、環をすがるように見上げる。

環「バス、一人で乗れる？」

通子「ウチラはどうすんだよ」

環「送迎バスでいいじゃん」

大黒「アレ、3人で乗らんの？」

環「一人で乗れる？大丈夫？」

香里「（うなづく）」

大黒「この後、もうバス来ないよ」

環「この子だけ乗ります。駅までお願いしま  
す」

大黒「(バスを指さして) コイツは、いつも  
駅に向かうんだ。もつと言え、駅にしか  
行けないんだ」

環「駅にしか行けない」

通子「なんかキツイ」

大黒「なんで？決められた道を決められたル  
ートで決められた時間で進む。俺は好きだ  
ね。安心できる」

環「そういう考え方もあるか。ね？」

通子「あるんだね」

大黒「ほら、乗るんなら乗りな」

大黒、運転席に乗り込んでいく。

環、隣に座っている香里の方を向いて  
笑う。

香里、環と目を合わせられずうつむく。  
そして小さく笑う。泣き笑いの顔。

環、香里を包み込むようにして肩を抱

くと、

環「さ、立って」

香里、立ち上がる。

後部の自動ドアが開く。

環、階段の前まで香里を連れていく。

刺された方の手から血がぽたぽたと落

ちている。

環「こっから先は、一人でいける？」

香里、立ち止まっている。

環「やっぱり、駅まで行く？一緒に」

香里「（首を横に振る）大丈夫」

環「うん」

香里、一歩、タラップに足を乗せる。

不安そうに振り返る。

環、香里が倒れないように手を広げた  
まま立っている（片手。血のついてな  
い方。血のついていない手は背中に隠す）。

環「大丈夫、ここにいるから」

香里、向き直り、もう一歩、タラップ  
を上げるも、ふらつく。

環「大丈夫？」

環、香里の背中を見つめる。

香里、手すりをつかんで立ち止まり、  
振り返る。顔は涙と鼻水でぐしゃぐし  
や。

香里「怖い、怖いよ」

環「大丈夫、大丈夫だから」

香里「もう無理。無理だよ」

環「大丈夫。香里ならできるよ」

香里「…かおり」

環「なんかあったら、いつでも連絡してきて。」

ウチら、同級生じゃん」

香里「…うん」

環「がんばれ香里。がんばれ」

香里、最後のタラップを上がり、立ち

止まる。

すると、自動ドアが閉まる。

バスのエンジン音が鳴りはじめる。

香里は立ったまま身じろぎしない。

バスがゆっくりと進んでいく。

環は、香里のことを見ている。

そしてバスは加速していき、坂の向こ

うに姿を消す。

地面に落ちている環の血がついた包丁。

環、腰が抜けたようにその場にへたり

込む。

環「怖かったあ」

通子「大丈夫？」

環「マジで死ぬかと思ったよ」

通子「アンタすごいよ」

環「ちよっとチビった」

通子「手、血。マジでヤバいって」

環、バス停に置いてある香里のハンド

バッグを見つける。

環「あ、どうする。コレ」

環、香里のハンドバッグを持ち上げる。

通子「そんなのどうだっていいから。救急車

救急車」

環「追いかけてよ。タクシー。アプリアプリ」

通子「ネット繋がらんし」

環「じゃあ、救急車も呼べないじゃん」

通子「上、上戻るよ」



通子、環のそばに駆け寄り、体を支える。

環「なんか久々、ヒリついた」

環「なんだソレ。娘？」

環「違う。ウチラ言ってたじゃん。聖蹟桜ヶ

丘のフェアリーズで。ヒリついたって」

通子「そうだったけ？思い出せた？あの子のこと」

環「思い出せない。でも、もう忘れないと思う。たぶん、一生」

環、自分の手を見る。

通子、環の顔をじっと見る。

環「何よ。ババアって言ったらぶつよ」

通子「アンタ、やっぱすごいわ」

環「お国を守ってるから」

通子「それは旦那。でも、アンタも守ったよ」

環「誰を？」

通子「最低でも、あいつは守れた」

環「三千春のこともね」

通子「全部アイツのせいじゃん」

環「でもさ、見たくはないじゃん。棺桶の中に包丁ぶっ刺されるの」

通子「確かに：でもちよっと見たくない？」

環「確かに。官舎で話せるかも。話題作り、難しくってさ」

通子「アイツ、マジで最後まで好き勝手生き  
たよね」

環「それはそれで辛かったかもよ」

通子「選んだのは自分じゃん」

環「選んだのが自分だから、辛いだよ」

通子「それもそうか。選んでるようで、選ば  
されたりしてるもんね」

環「誰かのせいにしていいんだよ。誰かのせ  
いにしてさ」

通子「ていうか、とりあえず病院行こ」

環「あ、そうだね」

通子「歩ける？」

環「歩けるよ。全然」

通子、環を支えて葬儀場に向かう坂に  
向かせる。

環、血のついてない手で香里のハンド  
バッグを持っている。

環、ハンドバックを通子に見せて、

環「アンタ、持ってよ」

通子「ヤだよ」

環「血が、ついちやうから」

通子「ヤだね」

環「香里がお母さんから借りたみたいだし」

通子「…香里か」

環「通子」

通子「名前で呼ぶなっの」

通子、香里のハンドバックを持つ。

環「ありがとう」

通子「うるせえ」

二人、葬儀場につながる坂を上がって  
いく。

環「とりあえず、タクシー呼ぼ」

通子「救急車でしょ」

環「いや、駅行かないと」

通子「なんで」

環「あの子に、ハンドバッグ返さないと」

通子「ほっとけよ」

環「きつとお財布とかも入ってるし」

通子「良いんだよ。あんなヤツ、どうなった

って」

環「さっきのことは内緒ね。みんなには」

通子「どうせ言ったって、誰も信じないでし

よ。それに、大分、出来上がってんじやな

い？」

環「そうかもね」

通子「そもそも覚えてないだろ。誰も。香里

のこと」

環「だね」

通子「ウチラだけが憶えてんだ」

環「たぶん、一生忘れない」

通子「私も忘れないよ。一生」

環「同級生って、そういうもんだよね」

通子「この状況で言うな」

環「言葉のチョイス違う？」

通子「ほんと、よくしゃべる女だな」

環「アンタもね」

通子「ちゃんと歩けよ」

環「手が痛いのに」

通子「痛くないって言ったろ」

環「実は、ずっと痛かった」

通子「やっぱ救急車じゃねーか」

環「転んだことにして」

通子「転んでこんな血、出るかッ」

通子、坂の上、霊園の入口にいる同級

生を見て、

通子 「リントロー。救急車、早く、救急車」

路上に残ったままの包丁。陽光を浴びて、煌めく。

(了)